地域がちょっと楽しくなったり元気になったりするんじゃないか

脇健仁さん（四十代）

ご自身について

愛媛生まれでですね。二十五歳ぐらいのときに来てまして。お蕎麦屋さんの場所に住んでた方と結婚させていただいたっていうのが経緯でこちらに来ています。

私自身は、介護事業とか障害福祉サービスっていって、直接お家に行って、いろんなサービスを提供するっていう訪問型のサービスを中心にさせていただいているんですね。ここ最近になっていわゆる通ってきていただくデイサービスなんかを展開している会社を経営させていただいています。

台風十九号の被害と状況

今まで過去最大級の台風が来るっていうのが前日ぐらいからニュースでも騒がれていて。洪水とかそういう話になったときは、私達も行けないので前もって逃げてほしい、避難していってほしいってことは伝えさせていただいたんですが、最初はやはり皆さん「大丈夫」って言うんですよ。みんなが「私たちは慣れてるし、いざとなったらあなたたちも来てくれるんでしょう」みたいな話をされるけど私たちはそうなったら行けないから。

なので、大袈裟だったなあぐらいの感じで済めばいいけど、とりあえず、避難してもらった方がいいと思いますってことで私たちが契約させていただいてる方については知人のお家だったり、避難場、公民館とかに避難していただいたってのもあったので当日は実は何もなかったんですよ。水が入ってきたとかもなくてよかったねという話はしていて。なので前もってやって正解だったなっていうのは一つありますかね。

ここの地域で僕は直接被災したわけじゃないんでお手伝いってことでここに入ってお片付けとかしてる立場ではあったんですけど、自分たちもここで一生懸命泥にまみれて、片した（片付けた）後にお腹すいたりとか、水分補給で（店に）買いに行ったりするじゃないすか。そうすると、（坂を）上がったらもう通常の世界なんですよね。迷惑にならない程度ですけど、凄い格好で僕らはここの非日常の中で動いている中で上がっていくと、急にもう何事もなかった日常があったりして。同じ水戸市内とか隣町でこんな違くて、入ったらね畑仕事でもしてきたんですかぐらいのすごい目で見られたりして。

これがまだお家があった頃ですかね、今砂利の駐車場になっちゃってますけど、向こう側に本当はお家があったんですよね。やっぱりゴミの片付けとゴミ全部出し終わってから初めて洗えるっていう状態になるんで。今回水は止まらなかったと思うんで、そこは助かったところではあるんですけど。ただやっぱり電気がなかなか厳しかったんで、自分たちなんか、発電機持ってきて、高圧洗浄とかで泥を落とすとかっていうのやってたんですけど、それもね普通の家庭ではなかなかないよね。

お蕎麦屋経営の経緯と想い

ここを蕎麦屋にしていくことになった経緯は、まずはやはりこの家を守りたいから、何か人が集うような形とか自然に使える形がいいよねって話になったときに、何かないかなと思って。そしたら元々蕎麦をうってた方と、義理のお父さんお母さんがたまたま知り合いになったタイミングがあって、蕎麦久しぶりに打ってみてえなみたいなことを言ってくれたから、じゃあうちでやってみたらどうみたいなことで、半分思いつきですよね。

ここ（飯富地区で経営する蕎麦屋）を開いたのは二〇二一年の十一月。被災してから二年後ですね。

一応ね福祉事業所がやってるのに障害者の方が入れない建物ってのも困るってことでスロープとかも水戸市の方で助成とかサービス使って、きちんとある程度補助をもらって、購入させていただいたりとかもしましたけど、そういうのはどちらかというと仕事で知識としてはあるので、そういうのを使いながら一応障害の方とかもね、結構来ていただいてまして、車椅子でも来れる場所っていうことでね。

僕らのこのスペースだけじゃなくてこの近所の方たちも上手に活用してもらえるようなスペースに。歩いていける飲食店が増えたからよかったっていうその声ももちろんあるんですけど、それそれだけじゃなくていつも蕎麦だとそれは飽きちゃうだろうしっていうところもあるんで。この辺の農家の方も多いですからね、そういうのにお手伝いできるような方法とかないかなって

というのは、今模索中というとこですかね。

地域の中でのチャレンジ

僕らはどうしても福祉とかそういう視点があるんでいわゆる「社会的処方」っていう言葉とか聞いたことあると思いますけど、何か地域にアプローチしようとする医療福祉たちだと思うんですけど。自分たちはすごくそれは違和感を覚えていて。医者以上だって医者以下でもないので地域に出ればただのおっさんじゃんみたいなところが。

結局僕らはその地域に出たら肩書き関係ないじゃないですか。いち一人の人間としての繋がりっていうのが求められている中で、その地域にアプローチするときに処方って医者が出すお薬の処方のことだと思うんで、その言葉も響きとしては自分の中で違和感を覚えていて。地域ってそういうもんなのかなあとか、下手に専門家がいろいろ健康のためああしましょうこうしましょうとか、孤独はいけませんよみたいな話しがちだと思うんすけど、別に孤独でも健康な人は健康だしほっといてって人も当然いらっしゃる中で、その自然な選択が当たり前にできるっていう安心が担保されるっていうのが多分地域なんじゃないかなと思っていて。

だからあんまりこうね、健康とか何か大義名分で口出すっていうのはしづらいなっていうところがあるんですけどそれを厚労省なんかも進めてますよね。地域包括ケアシステムとかそういうことでね。なので、それは一応僕らも、形的にはやろうとしてるんですけど、だからこそ蕎麦屋とかは、地域包括っていう介護で地域を何とかするとかじゃなくて、いやそういう話は違うよねっていうことの一例になればいいかなと思って、今チャレンジしてる最中だっていうのは実は僕の隠しテーマとしては実は持ってる。この蕎麦屋のやり方運営の仕方については。

飯富の未来を考えたい

自分の力は全然ないですけどなんかこうすると地域がちょっと楽しくなったり元気だったりするんじゃないっていうのは僕もよそ者だから多分、言いやすいってところがあるのかなと思って。まあよそ者の強みじゃないですけどそういうのはもう勝手に自分でも思っていて。

僕らの世代も、離れていく方も多いし。つい最近は、飯富は水害もコロナもあったので、しばらく市民運動会をやってなかった。それまで飯富は毎年やってたんです。それも結局この岩根地区に関しては、各地区対抗でも出せる人がいませんって話になってほとんど子どももいないし。本当に数名、両手で足りるぐらいの子どもたちしか小・中学校通ってない。それに世代も少ないってことで地区対抗となってくるといろんな種目をやるにあたっても、そもそも人を出せないんで私達は辞退しますっていうような話になっちゃって。一つの地区が辞退するっていうと他でやりましょうかっていう空気にはならないんですよね。

なので今までやれてたコミュニティ活動の一つも、やり方とかあり方を考えていかないと、そこだけ取り残されることにもなっちゃうし、それも違うかなって思って。じゃあどうやったらみんなが盛り上がるのってその対抗戦なくせばいいじゃんって話になるんですけど、対抗戦なくしたら無くしたで、盛り上がりが少なくなってくるっていうのがあったりして。そういうのがなくなっちゃうのは、非常に勿体ないし、続けていきたいんだけど、やっぱり責任問題とかって誰かが声を上げてしまうとね、コロナの責任ってどうしようもないでしょっていうところがあるんだけど。でも一人が言っちゃうと、言い出せなくなっちゃうっていうね多分それはどこのコミュニティも同じなんだろうなとかって感じてるんすけど。

特にこの飯富地区なんかはそういう水害とかがあるからこそ、本当は繋がってなきゃなんないと思うので、やっぱりきちんとね、どういう状況になっても繋がっていけるような方法を考えていかなきゃなとはいち住民としては思ってます。

でも、よそもんの僕らからするとやっぱりそれ(コミュニティ活動)があったから、いろんな人と繋がれたっていうところが大きいので、そういうのがなくなっていくと、そもそもここに来たとしてもどう繋がっていけばいいのかっていう手段が減るので、コミュニティが繋がるきっかけがだいぶ減ってしまうっていうのは非常にもったいないなと思うんで、どういう形であれ、何か考えていきたいよねっていうのは、思ってます。